

川下の風景⑦

～人生は川の流れのように～

米津 達也

【山と思考】

対人援助マガジンの締め切りが近づくにつれて、さあ、今回は何を書こうかと考えながら山を歩いている。折角、気持ちよく自然の中を歩いているのだから、もっと自然を愛でて良いのだが、ジョギング、登山、自転車など有酸素運動中は頭もクリアになるのか、自己対話が割に進んで、いろいろな面白いことが思い浮かんで来る。しかし、大概は下山すると忘れてしまうか、あの時思った以上の熱量を帯びていないかで、結局、あの時に思ったことは書かないままになっていることが多い。いっそ、歩きながらスマホに喋り続けてやろうか、と思ったりもするが、周囲に迷惑になるからやめておくし、おそらく後から聞いてもまともな文章になっていない。

世間がお盆休み、という期間はおおそよ通常通り仕事をこなした。世間が休みだと、どこに行っても混んでるし、子どもをどこかに連れて行ってやろう、という年齢も過ぎたので、特段ここで休みを取る必要もない。遅れて休みを取得し、天気良ければ立山でテント泊を、と思って準備もしていたが、生憎、天気に恵まれない。せめて、最終日ぐらいは日帰りで西穂高へ、とじっと天気と睨めっこしたが、気持ちよく登れる天候ではないらしい。アクセスだけで往復8時間、山行も8時間、労力はいとわれないが、財力に限りがあるので、次の機会とした。そんな夜にこれを書いている。1,000mであろうが、3,000mであろうが、山は山なのだが、高さよりも、行ったことのない場所への冒険心が魅力である気がする。天気と都合が合致していれば、今頃は床の中にいて、眠れぬ夜を過ごしなが、夜明け前の深夜に出発。深夜ラジオを聴きながら、コンビニ珈琲とパンをかじり、郡上八幡あたりで夜明けを迎える。ポツポツと上空に浮かぶ雲を見ながら歩く山々の稜線。標高2,000m以上で酸素も下界の8割程度。寝不足の感覚は無く、クライマーズハイになった頭で描く物語はどんなものだろうか、と少し想像してみる。

その玄関はいつもオープンで、鍵が掛かることは無い。家主は鍵の在り処を忘れてしまっている。朝日は明々と玄関と廊下を照らし出すが、西日はその奥のリビング・ダイニングの窓から燦燦と降り注ぐ。だから、西側のリビングに面する窓はいつもカーテンが閉じられて、室内は薄暗い。8月のお盆。暑い日々が続く。団地の中に人の気配は薄い。人々はそれぞれの故郷に帰省するのか、どこそこの観光地に出掛けているのか、それとも高齢者の多い団地だから、こんな暑い日は表に出ないのか、遠くの山で蝉の鳴く声がこだまする。いつもと違って少し嫌な雰囲気を感じるのは、玄関奥のダイニングに通じる扉が閉まっていることだ。家主は鍵の在り処も忘れていたが、エアコンのリ

モコンも無くしており、あそこの扉が閉まっていると風が通らない。西側の窓は日差しも強いが、裏手は田園風景が広がり、気持ちの良い風が玄関に向かって抜けていく。風の通らない室内。いっそ、家主は留守ということにして、このまま引き返そうか。インターホンを一度鳴らして応答が無ければ引き返そう。やがて扉を開けて、少し険しい表情の高齢の女性が現れる。やはり今日は外れだ。表情が険しい。3分前の記憶が保てない女性であるから、当然、私の顔は覚えていない。「いや～お兄さんに頼まれてましてね」と毎回同じ文句で始まり、なんとか彼女の警戒心を解くべく、表情と会話は何度も積み重ねてきた役場の人間を装う。薄暗いリビング・ダイニング。リビングには炬燵

が一式。炬燵テーブルの上には冷凍から揚げが袋のままひとつ。30代半ばの女性の遺影がキャビネットにひとつ。普段は無いが、遺影の前に湯飲みの水が供えられ、その前に犬の置物が列をなしている。

不思議だな、と思う。家主は、遺影の娘を亡くして以降、広いこの団地に独りで暮らしている。娘を亡くして20年余り、認知機能の低下に伴う物忘れは進み、4人いた子どもたちの存在を彼女は覚えていない。遺影が置いてあるキャビネット以外には実に殺風景な部屋で、テレビひとつ置いていないが、唯一、壁に一枚の年賀状が貼ってある。雪遊びの写真だろうか、小さい子どもが3人。「これはお子さん？」と毎回聞いているが、結局、誰なのか分からない。彼女の中では、自身の子ども4人は既に独立して暮らしている。それがこうして弔う仕草を見せるのだから不思議だと思う。

家主である彼女のジェノグラムを整理した時、亡くなった家族の多さに違和感を覚えた。親や兄弟が亡くなるのは、彼女の年齢からすれば必然だが、子どもが亡くなるのが早すぎる。最初の子は幼少期で亡くなった。年齢からして、事故か病気か。幼い子どもを突然失った夫婦は、その関係性を維持できずに別れた。彼女は3人の子を連れて、この団地に流れてきた。別れた夫からの養育費はあったが、3人の子を育てる為に、母親は働かざるを得なかった。何かと助けてくれたのは兄弟唯一の男である兄だった。一番上の子は学校を出てから早々に家を離れていった。もともと母親と折り合いも悪かった。末っ子は就職氷河期世代で、学校を出ても希望の職に就くことが叶わなかった。そんな末っ子が、20代で亡くなった。この家に残されたのは、母と娘のみ。二人は家族の死を背負って生きたが、やがて娘は仕事にも行けなくなった。

20数年前、その娘も母親よりも先に逝ってしまった。この家には子どもたちの思い出の影が見えない。殺伐としていて、当時の生活の面影が見えない。家主である彼女は、この20年でそれらの思い出を片付けてしまっているのかも知れない。押し入れの中に、それとも物置部屋の中に。そして、そのまま彼女は記憶を亡くしているのだろう。今は風呂場の場所も忘れているのだから。

彼女の言動が地域で問題になっているらしい。暴言、暴力、勝手に物を取っていく。団地内の共同生活ルールが守れない。何度か支援者が介入の糸口を掴もうと四苦八苦したようだが、興奮した彼女の返り討ちにあった。我々の社会に押し込めようとする、時に引っ張りだそうとする支援者たち。家族と支援者間で理解の度合いがズレている。一方、これからますます機能低下は避けて通れない。炬燵上の冷凍食品。あれは解凍していたのではないか。電子レンジが使えなくて困っているのかも知れない。玄関前の廊下に鉢植えの花がいくつか飾ってある。オレンジのマリーゴールド。金銭管理も出来ないからお金も持っていない。どこから手に入れたのかは分からない。そういえば、今日はいつもと印象が違った。髪が短く切っている。繰り返すが、お金を持っていない。連れていく家族もいないのだ。

ちゃんと栄養ある食事をしなければ。熱中症で倒れたら大変だから。お風呂に入っていないなんて。物忘れがあるなら、医師にちゃんと診てもらわないと。いろいろ手段は思いつくのだろうが、私は必要最低限以外の部分で動こうとは思わない。彼女の生活を、支援者がああだ、こうだとかねくりまわしても仕方がないのだから。

2022.8.25 米津達也